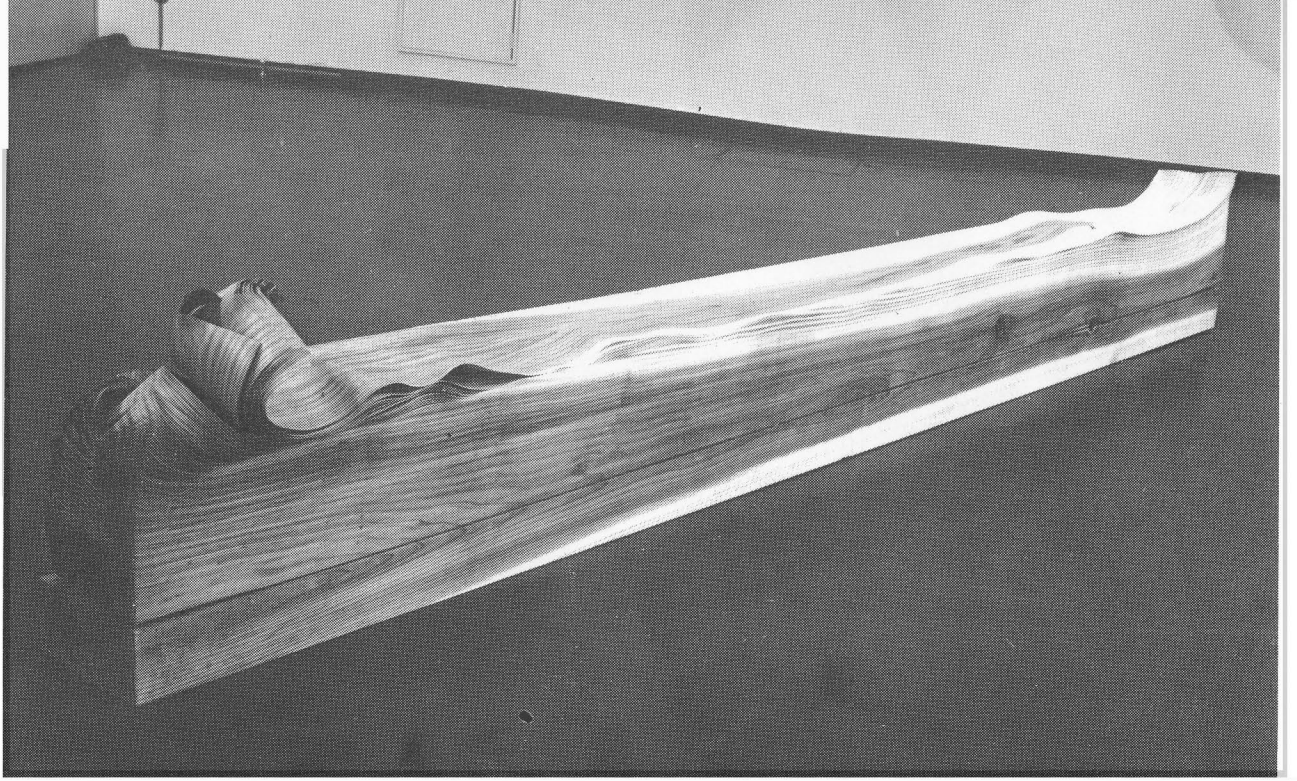


特集

# 明日への10年

日本現代美術の新世代

表現し思考する  
78作家の  
創造の鍵を探る



2—WOOD No.5-A 45×375×60cm 1975  
3—WOOD No.6-D 200×1800×55cm 1975

## 図版構成

- 青山巨幹・畦地拓治・池田一憲・伊藤藤彬・糸数都・今村幸生・  
丑久保健一・大石一義・加藤啓・角永和水・錦木昌弥・上矢津・  
北久美子・北辻良央・木村秀樹・銀次郎・国松明日香・桑田義郎・  
小嶋悠司・小林伸雄・小山愛人・斎藤隆・佐々木ふさ・佐藤達・  
沢居曜子・嶋剛・島田忠幸・清水誠一・下次正一・庄司達・  
鈴木俊行・高木修・高橋勝・高橋雅之・高間夏樹・高見沢文雄・  
田窪恭治・竹内浩一・田代幸俊・辰野登恵子・田辺和郎・田辺武・  
田淵俊夫・続谷奈津子・砥上賢治・内藤晴久・中島千波・中野武夫・  
中林富紀子・那須勝哉・根本喜美恵・野島一郎・羽生真一・浜口行雄・  
浜野年宏・林功一・林剛一・彦坂尚嘉・檀田伸也・福本和子・藤井博・  
星野勝成・堀浩哉・堀泰明・真板雅文・松本良一・宮崎豊治・森田秀・  
守屋行彬・矢田アキ・山田信義・山中信夫・山本衛士・吉仲正直・  
吉本直貴・和田守弘・渡辺栄一・渡辺哲也

## 執筆

乾由明・桑原住雄・末永照和・たにあらた・中原佑介・  
早見堯・平井亮・藤慶之・三木多聞・山岸信郎

## 角永和水

→28

Kazuo KADONAGA

46—石川県生まれ

69—国士館大学工学部建築学科  
中退

71—第十回現代日本美術展。個  
展(横浜市民ギャラリー)

72—第七回JAF展  
個展(村松画廊)。第八回  
JAF展。今日の作家(3年  
展(横浜市民ギャラリー))

74—個展(村松画廊)。ウヅエホ  
ダ百日間のシンポジウム  
(スウェーデン)。個展(ギ  
ャラリー16)

75—個展(村松画廊)。第十一回  
現代日本美術展コンクール  
佳作賞。仮称EXHIBISM展  
(神奈川県民ホールギャラ  
リー)。第十回JAF展

WOOD No. 6 B 木

50×60×70cm

1975 個展(村松画廊)



現代美術は、その表現においても、作家の状況のかかわり方においても、きわめて多様化し、混沌の様相をみせているといえよう。このことが、現代美術を「わかりにくい」あるいは「むずかしい」といわせているのかもしれない。しかしこれは「いま」に始まったことではなく、美術がそれまでの規範から大きくはみだりつつあった二十世紀初頭頃以来のことである。

本誌は、こうした「わかりにくくむずかしい」現代美術をよりわかりやすく紹介することを一つの目的として、一九四八年に創刊された。以来四百号を数える今日まで、折にふれて現代美術の「いまの問題」をとりあげてきたのである。



表現し思考する七十八作家の創造の鍵を探る

今回の特集では、日本の現代美術の動きのなかで、その傾向やジャンル、表現形式を問わず、幅広い分野に目を向け、不確定ではあろうが、明日の美術の可能性をさぐるべく、ここ数年来顕著に活躍している新しい世代の作家たち七十八名を紹介した。

作家選考にあたっては、その評価、選択基準に確たるものがあろうべくもなく、かなりあいまいなものになったことはさげられなかった。いさゝかの偶然性の介在していることも否定すべくもないが、これがまた現代美術のアクチュアリティでもあると考えるのである。

なお、作家選考は中原佑介、平井亮、末永照和、早見堯、桑原住雄、藤慶之の各氏と本誌編集部があつた。



太い生木というのが、角永和水の作品の中心的な素材である。その生木に切れ目を入れるというのがひとつの特徴となっていたが、一昨年の個展(村松画廊)において、彼はそれを意表をつくかたちで示すに至った。ちょうど果物の皮をはぐように、生木の外皮から中心に向けて木を薄く切りこんでゆき、ひとつづきの木の薄皮をもとのかたちに戻したり、一部をひろげてみせるといったのが、それである。

一本の太い生木とみえるものが、まるめられた薄皮だということに、一種の意外性を感じさせもするが、それとともに、それらの作品では、薄皮という要素的なものと、丸太という全体的なものが切れ目なく連続した関係を示している点が興味深い。方法はきわめて単純でいいが、この着想は単純ではない。ヴァリエーションの難しい仕事だが、これはこれでユニークな仕事である。

—中原